

会議名	アグリビジネス創出フェア2005
開催日時	平成17年10月6日(木)～7日(金) (調査日時:7日(金)10:00～16:00)
開催場所	東京国際フォーラム展示ホール(東京都千代田区丸の内3-5-1)
主催者	農林水産省(共催;生研機構、農生資源研、農環研、農工研、食総研、国際農研セ、森林総研、水産総研セ、農情報協会、食産セ、畜改良セ、水産大校)事務局;農林水産先端技術産業振興センター(STAFF)
参加人数(概数)	主催者見込みで、約6千人(3千人×2日間、出展関係者込み)
1. 会議の概要	<p>開催の趣旨は、技術移転、事業化、市場開拓などのビジネスチャンスに場を提供し、農林水産・食品産業分野における産学官連携を強化するため、大学、官民試験研究機等が一堂に会した農林水産省主催のフェアである。(別添資料参照)</p> <p>出展者は、農水省傘下の独法研究機関、大学、民間等88、小間数147で、昨年と同規模。近年に生研機構から出・融資を受けた事業の成果品が多かった。今回の企画展示は「食の安全と信頼に関する技術」をテーマとする展示コーナーが設けられたが、畜産関連の出展はなかった。</p> <p>出席して収集した関連情報から、「地域活性化のための畜産技術研究開発」等の当協会事業関連のものについて報告する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生研機構傘下研究所・生研機構支援センター： 出展された研究成果の中に、特に報告すべきものは見あたらなかった。 ・農林水産技術情報センター： 大臣認定TLO、高度化事業の成果品。 ・家畜改良センター： 出展関連団体名として「畜産技術協会」も掲げられていた。「牛肉トレーサビリティシステムにおける牛個体識別情報の記録」「CTスキャナーによるマンモス映像」のパネルも展示されていた。 ・東海物産(株)： 当協会出資会社ジャニフテックの親社で、同社の主力商品バルク調味料について「廃鶏屠体の有効利用の促進」を中心に展示されていた。ジャニフテックが開発して商品化が宿題とされている「廃鶏を活用した製品開発」について、展示説明要員として出席していた担当部長と情報の交換を行い、生研機構支援センターの企画課長も引き合わせ懸案解決について協力を依頼した。 ・富士平工業(株)： 同社の販売製品として一連の、小型堆肥化実験装置“かぐやひめ”(畜草研開発)堆肥熟度判定機器(畜環研開発)、発芽試験シート、種子成長袋が展示されていた。畜産起源廃棄物からの堆肥の活用促進のために、販売堆肥の品質保証項目として、これらのツールを活用した堆肥実需者に対応した熟度表示を行わせることが有効であろうと考えられた。 ・京都大学： DNAアレイを用いた肉骨粉含有検定法(日清製粉(株)都の共同研究) 放牧牛遠隔監視システム(CM-10X)による放牧管理(吉野電気と共同開発)が展示され矢野教授が説明要員。 ・新潟大学 新潟地鶏、食餌成分による食鳥風味の制御技術が出展され、藤村助教授が説明要員。 <p>そのほか7の国公立大法人等と東京農大(河野教授関連)等3私大関係が出展。</p>

<p>2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表課題・話題提供名</p>	<p>今回出展された研究成果はいずれも農水省等の公的資金によるもので一定の評価を受けているものであり、畜産分野の今後の研究分野の方向性を示していると考えられる。</p>
<p>3. その他の発表課題で関心のあったもの</p>	<p>ステージプレゼンテーションは6,7の両日行われ畜産関連では、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農環研(D.SPRAGUE): 無線通信技術を用いた野生動物早期警戒システム ・京都大学(守屋和幸): 放牧牛遠隔監視システム(CM-10X、当協会が佐藤衆介氏に委託した課題に供試と同一システム)による放牧管理 ・農生資源研(大西章): 移植医療に役立つブタを目指して(畜産大賞受賞関連) ・信州大(鏡味裕): 幹細胞分化制御による新規家禽育種戦略の確保(当協会助成課題関連) ・アビ(株)(米田昌浩): 特定外来生物被害防止法とマルハナバチの今後の利用(特用家畜委託課題の蜜蜂に関連する情報があったが、出席できなかったので展示ブースから情報を収集した。 <p>次の2題については聴講して情報を収集</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東海物産(株)(柳内伸也): 鶏ペプチド抗酸化飲料 ANCAR・FA が何故有効なのか東海物産のアンセリン・カルノシン強化チキンエキスシリーズの一環を成すもので、トクホ取得の可能性もあるとみなされるが、この分野の販売部門を持たない同社にとって、販売力を持つ提携先を見つけることが先決で、困難も予測される。 ・農水省技会事務局先端産業技術研究課民間研究推進室・生研機構支援センターほか: 産官学連携に向けて～農林水産省の研究支援の取組～:(次項4.参照)
<p>4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	<p>ステージプレゼンテーションにおける生研機構支援センター(吉ざわ努):(農林水産省の研究支援の取組)によるこれらの研究開発資金は組織的かつ大型。当協会が助成・委託する課題の選択にあたっては、より小型、萌芽的なものを選んで一定の成果を得た上で、更なる開発資金の獲得や販売ルート確保のために生研機構支援センターの事業に繋げるべきであろう。</p>
<p>5. 報告者</p>	<p>針生 程吉</p>